

ブルーストとビシャ

間歇性と習慣の二つの理論（その1）

沖 田 吉 穂

ブルーストが執筆を進めてきた長編小説の出版を模索するに当たって、ある段階まで「心情の間歇」という総題を与えようと考えていたことはよく知られている。これに代えて「失われた時を求めて」というタイトルを採用してからも、この表現をそのうちの一卷の、あるいは一章の表題として保存しようとした。そんなわけで、最終的には一つの章内部のエピソードに特に付与された提題の地位を持っているに過ぎないとしても、「心情の間歇」という表現にはこの小説全体に関わる主題性が込められているとみなされてきた¹⁾。

「心情の間歇」(Les intermittences du coeur) と表示されているエピソードで具体的に何が語られているかといえ、そこにあるのは祖母が死んで後、一年以上経ってはじめて語り手はその喪失を深く実感するに至るという内面的な経験の記述とそれに伴う考察である。最も大切な親族の一人が亡くなっても、われわれの主人公は直ちにその死を深く悲しむことはなかった。そのすぐあとに続くのは、むしろ浮薄な快楽の追求や社交の楽しみを続行する期間であり、われらの主人公は服喪の社会習慣を前時代的な拘束とみなしているとさえ受け取れる²⁾。しかし語り手の心の内に愛情に満ちた祖母の在りし日の映像が生き生きと再生するとき、彼は初めて自分が何を失ったかを痛切に知る。心の内に祖母がよみがえる瞬間、それはもはや彼女に再会することができないことを発見する瞬間である。その契機は、かつて祖母と一緒に過ごした海浜保養地での偶然の身体的な所作、それがもたらす印象によって与えられる。それが遅れてやって来たこの内面的な服喪の体験を、物語始めの部分にみる、あのお茶に浸し

たお菓子の味が起動させる幼年期の時空間の再生、そして最終巻で描かれるあの社交の集まりに向かう途上からその邸宅内控え室での連続的な「無意志的想起」ときわめて類似したものになっている。

それだけではない。祖母の肉体的な死の報告と、祖母を永遠に喪失したという魂の現実の報告との間には、出来事の順序に即した時間差、小説の上での数百ページの隔たりがあるだけでなく、その質的な対比によって、この小説が弁別を提起している二つの現実の間の位相差も照らし出されている。祖母の発病から加療そして臨終へと至る物語の叙述は、その病魔がもたらす祖母の身体的な変化の記述や、家族の看護や医師の処置、友人・知人らの見舞いや反応など、いわば自然的・社会的な現象や過程として、一人の人間の死を捉えている。その意味では19世紀の博物学的・生理学的小説や20世紀の大河小説にしばしば扱われている、外から観察された人の死に近い形態で、不足のない厚みを持つ叙述がすでに与えられているのである。しかしプルーストの小説はそこにとどまらない。同じ死が別の角度から問い直される機会を用意し、そこで「私の苦悩の独自性」を提起するのである。「心情の間歇」の理論とともに提示されているのは、死んだ人間こそが生き残っているという「奇妙な矛盾」の持つ重みであり、日常の生活の中では潜在しつつも忘れられていた自我の感受性の再発見である。そしてそこから導き出されているのは、知性が観察する物的現実に対する、感性が省察する精神的現実の、芸術の秩序における優位である。

それにしてもなぜ心情の「間歇」なのであろうか。この間歇の概念について、プルーストはこれを医学用語から借り、精神世界に転用したと述べている³⁾。しかしこの説明はわれわれを十分には納得させない。なぜなら医学において間歇（ないし結滞）と言う用語が通常指示されるのは病状であり、間歇熱とか結滞脈というのがその例であるが、それは器官の正常ではない不規則な活動によって起こるものである。しかし精神的な現象としてプルーストのテキストが提示する「心情の間歇」は魂の病的な状態というわけではない。むしろそれがわれわれの精神の働き方として常態であると主張されているのである。

また「間歇的な」とか「間歇的に」という表現は、『失われた時を求めて』に頻出するとは言わないまでも、比較的好んで使われていると思われるが、物質的な世界にも、外から観察された人間の振舞いの記述にも充てられている⁴⁾。間歇性が人間の性格や特徴に関わるとき、問題になっているのは現象の頻度である。間歇的なものは繰り返され、再発ないし再犯として確認しうるものであるが、「習慣的な」「常習の」といえるほどその頻度は高くない。言い換えれば、頻度が一定の水準を越えれば間歇的なものは習慣的なものになる。その意味で間歇性は習慣を否定するのではなくこれを補完しているとみるべきであるが、ブルーストの小説において「習慣」はしばしば大文字で表記される主題概念である。

こうしたことから、ブルーストにおける「間歇性」の問題は「習慣」の主題との関連において考察するのが有効であろうという見通しを持ちうる。この関連自体を跡付けてみることはブルーストの読解としてそれ自体必要な作業であるが、われわれが同時にここで提出し検証を試みたいと思うのは、医学用語から借用したという「間歇」の概念に、テキスト相互関連の観点から少しでも参照しうる文献があるのではないかということである。典拠を特定することが目的ではなく、対照することによって科学概念の文学への転用がどの程度の射程を持つものであるか、それを考察してみたいのである。取上げるのは医学というよりむしろ生理学の一著作であり、ブルーストの執筆した時代からはおよそ百年も前の学者の仕事である。すでにバルザックやフロベールの小説世界で名前の出ているフランスの偉人の一人であり、その学問の科学思想上の前提は19世紀の半ばから後半にかけて乗り越えられることになるが、その知見が忘れられることはなかったはずである⁵⁾。今日でもその名を冠した病院がパリにあり、父と弟が医者であったブルーストがその名前は無論のこと、その学説について断片的にでも知ることがなかったとはおよそ考えにくい。

『失われた時を求めて』に取りかかる以前のブルーストが書いた文章のうちでもよく知られているものの中で、次のような形でその名前が現われている。

これからの議論にも無益ではないと思えるので、その前後を引用してみよう。一つは『ルモワヌ事件』（1909年頃に話題となった一種の詐欺事件を素材とした一連の「模作」）の第一、「バルザックの小説において」である。この文体模写の小品に設定された舞台は、『幻滅』で王政復古下のパリ社交界を支配する人物として登場し、主人公リュシアン⁵の運命を大きく左右する役割を演じる、あのデスパール侯爵夫人のサロンであり、そこには『人間喜劇』の多くの再登場人物たちがすでに集まっている。ただ意図的な錯誤によって、時代は1907年に設定されている。

侯爵夫人、ブラモン＝ショープリ家⁶の出であり、ナヴァラン家、レノンクール家、ショーリュウ家とも縁続きのデスパール侯爵夫人は、客が到着するたびに挨拶の手を差し出していた。この手こそはデスプランをして、ラヴァタールの弟子であり、クロード・ベルナルをも凌ぐ当代随一の碩学たる彼をして、自分が医師として拝見した手の中で、最も深い計算に裏打ちされたものと言わしめた手である。突然ドアが開き、高名な作家のダニエル・ダルテスが姿を現した。精神世界の物理学者で、ラヴォワジエとビシャー有機化学の創始者⁷の天分を同時に備えた者だけが、高邁な人間が歩く時にたてる足音の特性を、その構成要素に分離しうるであろう。ダルテスの足音が響くのを耳にすれば、読者は震えたに違いない。こんな歩き方ができるのは、卓越した天分の持ち主か、さもなくば大物の犯罪人⁸だけであつた⁶。

もう一つは『サント＝ブーヴに反駁する』の中で、編者によって「サント＝ブーヴとバルザック」と題されている文章である。ここでブルーストは『人間喜劇』の作家が生活と文学を同じ次元で捉えていることを批判し、その感情の卑俗さを第一に指摘する。しかし同時に、自分の作り出す小説世界においてむしろ真の生活を生きていた作家⁹にあつては、その卑俗さこそが作品に「真実の

力」を保証していることを示唆し、それを小説の技法にまで関連させて次のように考察している。

こうした程々の高さにある現実、生活としてはあまりに空想的でありながら、文学にとってはあまりに卑俗な現実がもっぱら扱われているために、われわれがバルザックの文学に見出す楽しみは、生活が与えてくれる楽しみとしばしばほとんど変わらないものということになるのです。バルザックが有名な医者や偉大な芸術家の名前をあげようとして、実在した人間と自分の本の登場人物とをまぜこぜにして引き合いに出し、「彼はクロード・ベルナルとビシャとデスプランとビアンションの天分を兼ね備えていた」などと言うのは、単なる幻想ではありません。これはパノラマ画家のする仕事に似たやり口で、作品の前景に置く現実の厚みを持った人物像と、背景のだまし絵とを混ぜ合わせているのです⁷⁾。

比較的近い時期に書かれたこの二つの文章で、ブルーストはバルザックにおける虚構の人物の名と実在の人物名との隣接提示の手法を、批評と模作という二つの形式で吟味しているということになるが、『失われた時』の作者がわれわれの扱おうとする生理学者をどの程度まで知っていたかについて、少なくともバルザックを介しての認識はあったということを十分に示しているであろう。ここでクロード・ベルナルとビシャ、そしてラヴァタールとラヴォアジエは実在した学者であり、デスプランとビアンションが虚構の人物である。クロード・ベルナルの本格的な活動は19世紀の後半になって始まるので、バルザックの小説中にその名が引かれることはあり得ない。しかし『人間喜劇』の世界を20世紀初頭に置き直すとすれば、その語り手がビシャとクロード・ベルナルを並べるのは現実味の効果を増すことになるであろう。その博物学的小説空間には『実験医学研究序説』がすでに組込まれているはずだからである。

そんなわけで参照するのはグザビエ・ビシャ、『生命と死についての生理学

の研究』、1822年第四版（初版は1800年）である⁸⁾。ただし「間歇」と「習慣」が問題になっている第一部第四節と第五節を主に問題にする。

I 物語が起動する場所に現れる「習慣」と「間歇」

『失われた時を求めて』の冒頭から習慣は問題提起的に現れる。この物語の語り手が現在ではもはや完了したものとして報告する「長い間」の「早くから床につく」習慣である。そしていわゆる「習慣の半過去」により、寝室の薄闇の中での眠りと目覚めの交錯から、過去に過ごした様々の寝室の喚起が、その頃に繰り返しなされたものとして包括的に提示される。夏の部屋、冬の部屋、ルイ16世様式の部屋、そしてピラミッド型に穿たれた高い天井の部屋。とりわけこの最後の部屋が海浜保養地バルベックのホテルの部屋であるが、これはその漏斗を逆さまにしたような天井だけでなく、その家具・調度の配置や時計の音、殺虫性香料の匂いにまで悩まされてうまく眠ることができず、慣れるまでに時間がかかった部屋であった。こうして居住空間にたいするなじみの形で、習慣はまずその姿を見せる。

習慣、それは有能ながら仕事に時間のかかる住まいの改造者であり、最初は何週間にもわたってわれわれの精神を仮住まいの中で苦しめる。しかしわれわれの精神はこの習慣との再会をともあれ喜ぶのであって、習慣の助けを奪われ、自助努力あるのみの状況に追いやられれば、精神のほうでは宿舎を住みうる場所にしてくれる力は持たないだろう。(C.S., I, p. 8)⁹⁾

過去において住み、滞在した部屋がコンブレ、バルベック、パリ、ドンシエール、ヴェネチアと名指されたあと、コンブレの「私の寝室」が取上げられるのも、習慣との関わりにおいてである。この寝室が幼い主人公の気懸かりの中心となっているのは、母や祖母と離れて一人で早く就寝しなければならないからであるが、それと同時に、彼の気を紛らわせようと夕食前にこの部屋で

上映される幻燈がかえってこの子供の悲しさを増す。照明の変化が「自分の部屋に対して持っていた習慣」を破壊し、旅先で着いたばかりのホテルか山荘の部屋にいるように不安になる。主人公は、メロヴィング時代の過去から発出すると思われる幻燈の映像に、自分を魅了するものがあるとは思いつつも、さしあたっては、すでによくなじんだ部屋が見知らぬ空間へと変貌することに不安を感じるのである。

しかし時間をかけて自分の自我がすでに充満している部屋、そのために自分に対すると同じようにもはや注意を払わなくなっている部屋に、こうして神秘と美とが闖入してきたことで、私がどれほど不安な気持ちに襲われたかは言葉に尽くせない。習慣の麻酔作用が停止して、私はとても悲しいことを思ったり感じたりし始めるのだった。(C.S., I, p. 10)

ここで習慣は「自我」とある関わりを有し、居住環境への注意を不要にくれるものであることがここで示唆された上で、その「麻酔作用」、すなわち麻痺させることにより感覚の働きを止め、苦痛を取り除く働きを持つ力が語られている。これはわれわれを生理学的な連想へと誘うだろう。続いて語られるのが「就寝のドラマ」であり、そこではやや異なった、いわば教育学的な角度から習慣が問題になっている。すなわち子育ての課題としての子供の規律、子供を「習慣づける」必要であり、具体的には親と離れて決まった時間に一人で眠るくせをつけることである¹⁰⁾。習慣となったものは苦痛なく実行できるというわけだが、この習慣こそがまさに主人公には容易に身につかないものなのである。

さて実際に主人公が祖母とともにバルベックに到着した日、物語冒頭で素描されたホテル最上階の部屋の違和感が仔細に語られるが、疲労困憊と慣れないホテル滞在での緊張が身体感覚に一層即した形で述べられ、習慣の機能もより哲学的に考察されている。

私はせめてひとときでもベッドで横になりたかった。しかしそれがなんの役に立つだろう。こうした諸感覚の全体、それはわれわれ各人にとって、その物質的身体ではないとしても意識上の身体であり、ベッドの上でこれを静止させることはできなかったであろうから。またこの意識の上の身体を包囲している未知の諸物体は、その知覚作用に用心深い防御の体制を絶えず取らせることによって、私の視覚や聴覚などの全感覚を（私が足を伸ばしたとしても）、檻に入れられたラ・パリュ枢機卿のように縮こまって、立っていることも座することもできない窮屈な姿勢に置いたことであろうから。事物を部屋の中に置くのはわれわれの注意力であり、そこからこうした事物を取り去り、そこにわれわれに居場所を作ってくれるのは習慣である。（J.F., II, p. 27）

ここまででブルーストにおける居住空間と習慣の関係はかなり明瞭になってきたであろう。初めて宿泊する部屋ではわれわれの主人公は落ち着かない。身体にとっての外部世界が生物学的環境であるが、未知の環境では身体的全感覚が目覚まし、その知覚作用を能力一杯に働かせようとしているからである。こうした感覚器官の興奮や苛立ちを、われわれは知性や意志など精神の力で静めることはできない。一方すでに慣れ親しんでいる環境では、「意識上の身体」は改めて自己を位置付ける必要がないので、刺激を与えない外部世界はほとんど存在しないものになるのである。19世紀の博物学的な小説群では、環境は物語に常在する与件であった。ブルーストに至って、それは意識の対象となることによって初めて物語世界内で意味を持つものになる。

外部からの刺激を鈍化させ、ほとんど存在しないものにしてくれるのは、妖精か守護神のような「習慣」の仕事である。すでに「住まいの改造者」として習慣が擬人化されているのをみておいたが、次のくだりではこの守護神は忠実な召使の姿さえとることになる。

しかし二日目からはホテルに泊まりに行かなければならなかった。そしてそこでは自分が不可避免的に悲しくなってしまうことがわかっていた。この悲しさは自分が生まれて以来あらゆる初めての部屋が、つまりすべての部屋が発散する息の詰まる香気のようなものであった。ふだん住んでいる部屋では私は存在していない。私の思考は他の場所にあって、自分の代わりにただ「習慣」を送ってよこすのである。しかし初めての土地では神経の図太いこの女中に、私の身の回りの世話をさせることはできない。そこへは私のほうが一人で先着するので、数年の間隔をおいて再会するが昔とちっとも変わらないあの「自我」に、事物と接触させねばならないからである。この「自我」はコンブレー以来、またバルベックへの最初の到着以来、まるで成長しておらず、荷を解いたトランクの片隅で癒されることもなく、泣いているのだった。(C.G., II, p. 381)

われわれの主人公が泊まりに行こうとしているのは、友人のサン＝ルーが軍務に就いている町、ドンシエールのフランドル・ホテルであるが、ここでは不安は当たらず、18世紀の大邸宅を改装したこのホテルが大いに気に入るのである。「神経の図太い女中」と言うのは無論コンブレー以来の一家の女中、フランソワーズを連想させる。実際バルベックへの最初の旅では、この女中を先着させようとする祖母の誤った指示から、フランソワーズは乗換駅で別方向の列車に乗り、語り手とその祖母よりはずっと遅れてホテルに着くのであった¹¹⁾。しかしここで何より注目しておきたいのは、初めての部屋で一人寝るのを不安に思うこの泣き虫の「自我」が、「数年の間隔をおいて」現れるだけであるという言及である。間歇的な自我の働きが垣間見られよう。

ブルーストの部屋は物語が起動し、また再起動する場所である。小説が舞台空間を移動させるのに対応して、滞在地それぞれの部屋があり、そこからすでに終わったはずの物語、とりわけ愛の物語の余波を湛えつつ、新たな展開が始まる。バルベックへの最初の旅立ちは、スワンの娘ジルベルトへの恋を断念し

て二年の後、ほとんど彼女に無関心になった頃になってなされるのであるが、ここで感情生活と心の習慣に関連して自我の間歇性が確認されている。

しかしこうしてバルベックに向けて出発する時、そしてその滞在の始めの頃は、私の「ジルベルトに対する」無関心はまだ間歇的だった。しばしば(われわれの生命は年代順を尊重することがとても少なく、日々の連続の中に余りに多くの時代錯誤を競合させるので)、私は前日や前々日より古い、ジルベルトを愛していた頃の日々を生きていた。その場合にはもう彼女には会わないということが、彼女を愛していた時期のように突然に辛いものとなった。彼女を愛していた自我が、もうほとんど完全に別の自我に席を譲っていたにもかかわらず、不意に再び現れるのであった。そしてこの自我は、重要な事柄ではなく取るに足りない物事によって、私のところに戻された。(J.F., II, p.3)

ここで例として取上げられている「取るに足りない物事」というのは、「郵政省の局長の家族」という、かつてジルベルトが口にしたことのある言葉を散歩中に耳にすることであるが、これが「ずいぶん前から大部分廃棄されていた自我」に、ジルベルトから離れてしまったことの苦痛をあらためて鋭く感じさせる。間歇的なものが無関心であるにせよ、愛着であるにせよ、そうした時間上の間隔をおいて異なった自我が交代して現れるのは、心の習慣が忘却を準備するからである。語り手はここで「愛の思い出は記憶の一般法則の例外ではなく、この記憶の法則もより広範囲にわたる習慣の法則によって統御されている」と続け、繰り返される現象の確認から「一般法則」への帰納を志向する。そして習慣の法則は記憶の法則よりも包括的なものであるとするが、それは「習慣はすべてを弱める」ので、「ある人間をわれわれに一番よく思い出させるものは、われわれの忘れていたもの」だからである¹²⁾。これは無意志的記憶の前提条件としての忘却であるが、それは習慣の鎮静効果があって初めて機能す

る。

われわれの主人公がその希望を持ちながらバルベックに長い間旅立つことができなかったのは、ジルベルトに会おうとすることは自分に禁じながらも、彼女のいるパリを離れたくなかったからである。ここで居住空間に対する習慣と、愛に関わる感情の習慣とが通底するものである可能性も指摘されている。

未知の部屋に泊まることの不安、それは私が持っているだけでなく他の多くの人も抱くものであるが、この不安は今の生活の最良部分を構成する事物が示す、あの絶望的で大規模な抵抗の、最も控えめで目立たない、体質的でほとんど無意識の形式に過ぎないのかも知れない。そうした事物は、自分の姿のない未来形態をわれわれが心の中で承諾することが許せないものである。(J.F., II, pp. 30-31)

ジルベルトの父であるスワンが、遠い異国での滞在という形でかつて示唆したように、新たな土地で暮らし、そこで新規の人間関係を始めれば、時間がかかっても習慣が部屋を住みうるものに変え、新たな友人が大切になりはじめるだろうと、「私の理性」も教えている。実際に物語もそのように進行するのであるが、バルベック滞在の初期においては「今の生活の最良部分を構成する事物」が、いわば心の慣性ないし惰性によって、働きつづけている。

たしかに土地や人に対するこうした新たな友情は、古い友情の忘却を横糸にしている。しかしまさに私の理性は、大切な人々と永遠に別れ、彼らを思い出しもしなくなる生活の展望を、私が怯えることなく持てるだろうと考えているのである。そしてわが理性はまるで気休めのように忘却の約束を私の心に与えてくれるのであるが、この約束こそが反対に心の絶望を掻き立てるのであった。われわれの心もまた、別離が成就すれば習慣の鎮痛効果に浴さないわけではない。しかしそれまでは苦しみつづけるのであ

る。(J.F., II, p. 31)

習慣は環境への注意力を無用にするだけでなく、感覚を鈍化するので、当然に苦痛を緩和する。「麻酔作用」にしろ、「鎮痛効果」にしろ、感覚の受容器官ないし伝達器官に働くものであるが、生理学的な語彙を心理に転用しているのは明らかである。習慣が感覚と感情をどのように麻痺させるものであるかは、われわれがこれから参照する生理学のテキストが考察を加えている。ただそこへ移行する前に、われわれの関心の出発点にあった「心情の間歇」のくだりを確認しておこう。これはバルベックへの二度目の滞在の初日に同じホテルの部屋でする心の経験であるが、蘇ってくるのは最初にバルベックに到着した日の祖母の優しさである。

神経が興奮し、なじめない部屋で一人眠らなければならないことに苦しむ主人公はすでに見た。人を看病するときのように部屋着で入ってきた祖母は、すべてを理解し受け入れながら、そこで主人公をベッドに寝かせ、上着と靴を脱がせてくれる。自分で半長靴を脱ごうとするのをとどめ、いわば幼児にするように就寝の世話をしてくれたこの時の祖母が、自分で靴を脱ごうと身をかがめ、靴に触れる同じ姿勢によって、年月を隔てて蘇生する。それは「無意志的で完全な記憶」における「生きた現実」の再発見であるであると語り手は言う。逆にいえば、祖母が亡くなって以降、祖母のことを語り、考えることがあっても、そうした言葉や思いの中に、「本物の祖母」はいなかったのである。そこで語り手は次のように考察を続ける。

どんな時にそれを検討するにせよ、われわれの魂の総体というのは、ほとんど虚構の資産でしかない。その富の目録が何度も報告されていてもそうなのである。というのもある時はこの財産のある部分が、またある時はその他の部分が自由に動かせないからであって、このことは実効性のある豊かさであれ夢想の上の豊かさであれ同じことである。私の場合であれば、

ゲルマントという古い家名が喚起する夢想の豊穡さも、またそれよりはるかに重大な、祖母に関する本当の思い出の豊富さもということになる。それはなぜかといえば、記憶の混乱には心情の間歇が結びついているからである。われわれの内的な財産のすべて、過ぎ去った喜びや悲しみのすべてが永続的にわれわれの所有物であると思えるのは、恐らくわれわれに身体があるからであり、こうした誤解においては身体はわれわれの精神性を収めている容器に似たものになる。こうした喜びや悲しみが逃げて行ったり戻って来たりすると考えるのも、多分同じくらいに不正確であろう。いずれにせよそうした感情がわれわれの内に残っているとしても、それはほとんどの場合見知らぬ領域にあって、そこではこうした過去の感情はわれわれの役に立たず、そのうちの最も日常用のものでさえ別の次元の記憶、意識の中でこれらとの共存を一切排除する記憶の数々によって抑圧されている。しかしこのような喜びや悲しみが保存されている感覚の枠組みが再び拾い上げられれば、今度はこの感情のほうで自分とは相容れないものを同じ権限ですべて追放し、そうした喜びや悲しみを経験した自我それだけをわれわれの内に落ち着かせるのである。(S.G., III, pp. 153-154)

『失われた時を求めて』の中で、「心情の間歇」という表現が出てくるのはここだけである。同一の感覚が再生させる過去の生き生きとした現実感という点で、これが「無意志的記憶」の一つであることは間違いないが、ここで間歇を準備しているのは忘却ではなく「抑圧」である。実際のところ、語り手は祖母のことを忘れていたわけではない。しかし日常的な想起や言及の中に「本物の祖母」はいなかった。忘却ではなくいわば忘恩の自我が、祖母の死後直ちにその真の姿を意識から排除したのである。この論理に生理学と関係がありそうな要素はほとんど見当たらないだろう。「無意志的記憶」に感覚の枠組みが関与しているとしても、それは契機に過ぎない。しかしわれわれがここで留意しておきたいのは「魂の総体」は一種の資産表に過ぎず、現実にはそれらが全部出

揃って働くのではないという部分である。魂の構成要素には活動する時期と休眠している時期があって、それが互いに交代しながら作動するのが間歇性であるとすれば、これは精神の入れ物たる身体に、その基本図式があるかもしれない。

プルーストのテキストで「間歇」を直接に生理学的な意味で使っていると思われる部分は、祖母の臨終直前の場面にある。次のくだりである。

酸素吸入器の立てる音はしばらくの間やんだ。しかし祖母が呼吸しているうれしい徴であるうめきは軽く、変化が多く、不完全でも絶えず再開しながら、相変わらず湧き出していた。時としてすべてが終わったように思われ、それが眠っている人の呼吸に見られるのと同じあの音程の変化によるのか、あるいは自然な間歇によるのか、麻酔の効果なのか、窒息の進行なのか、それとも何か心機能の衰弱なのか、息を吐く音が止まった。医師は祖母の脈を取ったが、川の支流が乾ききった本流に約束の水量をもたらすように、はや新しい歌が中断した楽節に接続した。そして尽きることのない同じ生気で、この中断した楽節が別の声域でまた始まる。(C.G., II, pp. 639-640)

語り手の注意はかろうじて命脈を保っている祖母の呼吸に集中している。その一時停止が、彼に複数の仮説を提出させる。この中に「自然な間歇」が、睡眠や麻酔や機能の衰弱と並んで、物語の折り込む襞のように現れる。プルーストの小説には自我の複数性が露呈する「心情の間歇」が語られるとともに、生理的で自然な間歇も言及されているのである。ここで間歇は身体現象に対する可能な説明の一つとして出ているのであるが、もう一つ別の例を取り上げてみよう。今度は健康な若い女性が眠っているのを語り手は見ている。そこで彼の注意を引くのもその呼吸音である。

時として実際、私が起きて父の書斎へ本を一冊探しに行く場合など、彼女はの間ここで横にならせて欲しいと言うこともあった。すると野外での午前と午後の長いハイキングに疲れているので、私が自分の部屋にいないのがごく短時間であっても、戻ってみるとアルベルチヌは眠り込んでいたのであった。私は起こさない。彼女は私のベッドの上に、想像できないほど自然な姿勢で長々と横たわっていて、長く茎の伸びた一輪の花をそこに置いたといった風情である。(中略)

部屋に入る際、私は敷居で立ち止まって物音をたてないようにする。そうすると彼女の呼吸音が口許で、規則的な間歇の間を置いて途切れるのだけが聞こえる。引き潮のように、だがもっと静かでやわらかに。そして私の耳がこの天上からの潮騒を拾う時、魅惑的な囚われの女の全人格、全生命が目目のすぐ前に横たわり、この音の中に凝縮しているように思われるのであった。(P., III, pp. 578-579)

眠っているアルベルチヌは「一本の植物」になったかのように「無意識の生命」の働きで呼吸の音だけをたてている。目を閉じ意識を失うことによって、「人間としての様々な性格」をひとつひとつすでに脱ぎ捨てている、と語り手は考える。だから目覚めている時とは異なり、かすかな吐息を自分のほうに放つこの生命を、自分は「所有している」と思えるのである¹³⁾。これが語り手にとって、同棲生活が与える最も幸福な時間である。「間歇的な」という形容詞について言えば、原文では「規則的な」と並んで「間隔」を修飾しているに過ぎず、やや冗語のようにもみえるが、引き潮という比喩を生理現象に充てるには必要な媒介項なのであろう。アルベルチヌの眠りは「湖のように穏やかになったバルベック湾での、あの満月の夜」のように、静かで甘美な時間を与えるが、また「これほど純真でない楽しみ」も味わわせてくれた、と語り手は述べている。体を密着すると、空中で眠っている鳥が示す「間歇的な羽ばたき」に似た軽い微動が、彼女の脚から自分の脚に伝わり、呼吸のたてる音は一

層強くなって、快樂に伴う息切れの錯覚さえ与える。

波の碎けるのを聞いて何時間でも浜辺にいるように、私は心を和ませる無欲な愛で彼女の眠りを味わった。自然が与えてくれるのと同じこうした心安らぐ静けさを、小康期の間に人間から与えてもらうには、恐らくこの人間はあなたをひどく苦しめる力を持っているのではなくてはなるまい。(中略) 彼女の混じりけのない吐息がたてる、かすかな微風のように心を静めるささやきを絶えず聞き、耳で拾いつづけている間、私の前にあり私のものとなっているのは、ひとつの生理学的な存在のすべてなのであった。(P, III, p.581)

祖母から恋人アルベルチヌへと対象は移動しながらも、ここで観察されているのは他者の生命現象としての眠りと呼吸であり、その枠の中で間歇が語られ、「生理学的な存在」としての人間が扱われている。しかし恋人を海浜保養地から引き離し、両親の留守中にパリの家に招き入れて始めるこの生活の叙述においては、冒頭から語り手の自我の複数性も再度提示され、その間歇性が考察されている。それが寢室の喚起から出発する物語の再起動を画すのである。そこにあるのは晴雨計の姿を取った自我ともいうべきもので、この内なる「間歇的な小人物」のおかげで、語り手はベッドの上にて壁の方を向いたまま、というよりもまだ眠っている間に、外がどんなお天気であるかわかっていると言う¹⁴⁾。朝目を覚まして語り手は恋人をすぐ呼ぶよりも、一人きりの時間をゆっくり持とうとする。そしてアルベルチヌがもはやさほど美しいとは思えず、一緒にいても退屈で、彼女を愛してはいないという感覚がはっきりとあると述べつつ、こう続けている。

そんなわけで朝の時間を始める際にも、私はすぐに彼女を呼ばなかった。とりわけ晴天氣の朝にはそうであった。すでに述べた、お日様に向かって

歌を謳って挨拶するあの内なる小人物と向かい合って、しばらくの間私は時を過ごすのであり、そのほうがそばに彼女がいるよりも気分がいいのである。われわれの人格を構成するこうした小人物のうちで、第一に目に付きやすいものが一番肝腎なものというわけではない。病気のためにこうした小人物たちが次々に打ち倒されても、私のうちには他より頑強なものなお二、三人残るであろう。たとえば二つの作品、二つの感覚の間に共通の部分を発見してはじめて幸福をおぼえる哲学者らしき人物もその一人のはずである。しかし最後の最後まで残る者は、コンプレーの眼鏡屋さんがお天気を知らせるためにショウ・ウインドウの中に置いてある、あの人形によく似た小人物なのではないかと私は何度か思ったものである。眼鏡屋さんの人形は晴れるとすぐにフードをはずし、雨が降りそうになるとそれをまた被るのであった。(P, III, p. 522)

語り手の人格を構成する諸要素、間歇的に姿を現す自我の中で最も生命力の強いものが天候の変化に敏感なこの小人物ということになるのだろうか。気候条件が生命体にとって第一の外部環境であるとすれば、ここにあるのは内面化された「生理学的存在」と言えるかも知れない。バルザックやゾラの生理学的な関心はよく知られているところであるが、外的な事実ではなく魂の中の現実をこそ探求しようとするブルーストの小説にも、生理への視線が位相を変えながら組み込まれていることは確認できたであろう。ここでビシャのテキストへと移行することにしよう。

II ビシャにおける「間歇」と「習慣」

1. ビシャ生理学の歴史的地位

グザビエ・ビシャ (1771-1802) の生理学は「生命とは死に抵抗する機能の総体である」という著作冒頭の定義が示すとおり、活力説 (le vitalisme) を代表するものとして知られる。放置しておけばものを腐敗させるはずの外部の力

に抗して、生命体が自己保存できるのどのような働きによるのかを問い、その根源に生命活力ないし生命特性を措定して、生命原理を物理・化学的原理とは異質なものとみなすのが、活力説の基本的立場である。この意味では決定論を志向する実験科学としての生理学の成立を遅らせる役割を果たしたともされるものであるが、その課題設定には機械論的生命観への不満があった。物理学的な自然観の支配に対する生きた自然の観察者たちからの抵抗である。

ガリレイとデカルト以来、物理学は慣性の原理を中心に置くが、慣性とは生命とは反対のものであり、これ以降自然は死んだもの、その内には動因を持たないものとなる。そうした自然の中で生命体はどのような居場所を持つだろう。デカルトの二原論は延長を持つ実体（物理学の対象）と思考する実体（魂）とを厳密に区分し、そのことによって神学的なあるいはアニミズム的な宇宙観から哲学を解放するが、そこでは生命現象の地位が定かでない。一般に17世紀・18世紀の機械論的生物観では、生命体は機械的自動人形であり、入れ物たる固体部分とその中を流れる流体部分からなる一種の水力機械であった。活力説はデカルトの二元論の延長を持つ実質と思考する実質に、生命ある実質を加えようとする。その持つべき能力は自己保存（分解と再組織）、運動の自律性、そして発生と発達である。

活力説は17世紀末に始まり、19世紀後半中に終わる。その中心に位置したのはモンペリエ学派と呼ばれる医師たちの仕事であり、テオフィル・ド・ボルドゥー（1722-1776）及びポール＝ジョゼフ・バルテーズ（1734-1806）がその代表者であったと言われる。ビシャはこの系譜の末尾に位置する医学・生理学者であるが、より経験主義的で感覚論的な立場から、観察と実験を重視し、解剖学上の業績が顕著で、組織学（l'histologie）の創始者ともされている。活力説に決定的な終止符を打つのは、その『実験医学研究序説』（1865）で文学の世界にも大きな影響を与えることになるクロード・ベルナール（1813-1878）である。ただ生理学における実験がベルナルの登場を待って始まったわけではなく、科学認識論的な切断は生命体に物理・化学的な分析手段を適用できるかど

うかという部分にあった。ビシャは生体組織内の成分が絶えず変化し予見しがたい以上、生命現象には物理現象とは異なる原理があるという見方を維持した。死によって物理的な原理への全面的な従属が始まるが、それまではこれに抗する力が働いている。またビシャは流体成分の変化には限度があることを認めながらも、その不規則性はこれを計量化にはなじまないものになっていると考えた。生命現象を化学的な変化の過程として最初に捉えたのはA.L.ド・ラヴォワジエ(1743-1794)の呼吸研究であるとされる。ここで燃焼が生命現象の中心に位置を占めるようになるが、ビシャの時代にはまだ化学の発展は十分ではなかった。活力説以前の生命体が力学的な機械であったとすれば、活力説を乗り越えるのは化学的な機械としての生体観である。クロード・ベルナールは「内的環境」の概念を提起し、これを恒常的に保つための調節機能こそ生命の特性であるとする。この内的環境において、原理的には外部世界と共通の物理・化学的变化が展開するのであり、このことによって生理学は実験科学となる資格を十分に整える。外界の変化から保護すべきものがあるという部分は引き継ぎながら、観察手段と記述方法を外的な自然の研究と共通のものにしたのである¹⁵⁾。

2. 動物活動と器質活動

さてビシャは動物の生命活動を構成するものとして、動物活動(vie animale)と器質活動(vie organique)という二種類の活動を明瞭に異なったものとして区分することから、『生命と死についての生理学的研究』の叙述を始めている。これは彼の時代の生理学が、生命体を構成する組織(tissu)に特徴的なものとして「感覚」と「収縮性」に着目したこととよく対応している。つまり刺激に対する感応性(irritabilité)であるが、ビシャはこうした感覚反応には頭脳ないし魂に伝えられて意識化されるものと、局所的なものに留まるため無意識なものとがあるということを指摘しようとした。前者を動物感覚、後者を器質感覚と呼んで区別するとすれば、こうした刺激に対する反応の相違の根拠として、動物活動と器質活動の区分が要請されることになるだろう。動物活動というの

は「アニマ（魂）に関わる活動」という意味でもあり、感覚・運動機能や知的機能を包摂している。呼吸や消化や循環といった生命維持の基本に関わる活動が器質活動である。

動物は器質活動によって「自己の内部で」生きているのに対し、動物活動を通じて「自己の外部で」存在し、世界の住人となる。すなわち自己を取り巻くものを感知し、自己の感覚を反省し、その影響に応じて意志的に活動する。しかしどちらの活動においても外部と内部との間に双方向の運動が見られる、とビシャは指摘する¹⁶⁾。動物活動においては、「事物の印象が感官、神経そして頭脳に次々に作用する」が、頭脳で意欲が生まれると、それは神経を通じて実行を受け持つ運動器官や発声器官に伝えられる。器質活動においてみられる往復運動は身体の合成と分解、あるいは物質の同化と異化であり、これが生物を自然界における物質の循環に適応したものになっている。そして器質活動によって、生物はその身体を絶えず更新している。すなわち「古代人が、またそれに倣って何人もの近代人が指摘した」とおり、「ある時期にはそうであったところのものであることを、別の時期になるとやめる」のであり、「その組織構成は同じでありつづけながら、その要素は絶えず変化している」ということになる¹⁷⁾。すでに垣間見たように、ブルーストが自我のあり方を問題にする時の主たる特徴は、人格としては同一でありながらそれを構成する要素が更新されること、つまり時を経て古い自我は完全に死滅し、新しい自我が生成されていることを確認するところにある。

ビシャは動物活動と器質活動の相違の表れを器官の形態において、すなわち前者を司る器官の左右対称性と後者の器官の非対称などで指摘した後、活動の持続の面からみた相違へと考察を移す。そこで扱われるのが間歇性と習慣であり、これに第四節と第五節を充てているが、ここで主に問題となるのは当然ながら動物活動の方である。というのも、呼吸や循環の中断が少しでも長引けば、生命が消滅するからであり、また習慣が影響を及ぼすのは動物活動だけに見られる現象だからである。この両者を順次見ていこう。

3. 動物活動の間歇性

動物活動をする各々の器官は疲労することにより、また使い果たした力を更新する必要から、動きを中断する。これが動物機能における活動の間歇であり、連続性が不可欠である器質機能には見られない現象である。ビシャはこれを睡眠に引き寄せて説明する。それは、睡眠こそが動物活動の間歇性を最もよく例証し、かつ代表するものだからであろう。

動物活動の間歇はあるときには部分的であり、あるときには全般的である。ある孤立した器官が長い間活動し続けたのに、他の器官は不活発のままであったという時、間歇は部分的になる。そのときこの器官は弛緩し、他の器官が目覚めているのに自分は眠る。これが恐らく、われわれがすでに見た器質活動とは違って、動物機能の各々が他の機能に直接従属していない理由である¹⁸⁾。

器官の活動の個別的な間歇は部分的な睡眠であるというわけであるが、逆に床についてからの睡眠中に「頭脳の活動は存続していることがある」。それが夢であろう。この場合、「感覚器官は刺激に閉ざされている」のに「記憶や想像力や反省」が頭脳で働きつづけているのであり、その結果「運動機能や声も」活動することもあるだろう。かくしてビシャは動物活動の「間歇性の法則を睡眠の理論に適用する」方向へと筆を進めることになる。ここで睡眠と夢への関心がブルーストの物語世界にみる両者の重みをただちに想起させるであろうが、その考察は後回しにして、まず「理論」と「法則」への志向がビシャの記述に特徴的であることに留意しておきたい。問題になっているのは動物活動の持続性に関わる法則であるが、ブルーストの語り手が記憶と習慣をめぐる「一般法則」を語っていることはすでに一部見ておいた。われわれの生理学者のほうは論旨に沿ってこう続ける。

全般的な睡眠は個別器官の睡眠の総体である。これは動物活動がその働きの中で、活動期間のあとに間歇の期間を常に連続させるという法則から派生するのであり、すでに見たように、この法則の存在が器質活動から動物活動を特に区別する理由である。それゆえ睡眠は器質活動に対して間接的影響しか与えないが、動物活動にたいしては全的な関わりを持つのである¹⁹⁾。

「完全無欠の睡眠」においては、あらゆる外部活動が中断されるが、「全く不完全な睡眠」では、孤立した器官しか影響を受けない、とビシャは言う。だからこれら両極端の間には、「数多くの中間形態が見られる」ことになるだろう。ビシャはここで「夢は動物活動の中で、多くの部分が麻痺しているのに、ある一部分がこれを免れている状態にほかならない」と夢を睡眠の考察の中心に位置付けると同時に、動物活動の間歇を一種の「麻痺」として扱っていることを示唆している²⁰⁾。これは後段で見る「習慣」の働きとしての感覚の鈍化を、「間歇」のもう一つの形態、少なくともそれに準ずるものとみなしてよい理由となるはずである。いずれにせよ、ビシャにとって夢は睡眠の多様性を証言するものに他ならない。

睡眠をその現象において安定した変化のない状態と考えてはならない。われわれが二度続けて同様な眠り方をすることはほとんどない。数多くの原因が、働きの間歇性の一般法則を動物活動の大小様々な部分にあてはめることにより、睡眠を変化させるのである。その様々な度合いは、この間歇性に見舞われる機能の多様さで示す必要がある²¹⁾。

睡眠の多様さは「間歇性に見舞われる機能の多様さ」に根拠を持つとビシャは説明し、間歇性の説明原理としての有効性を重ねて主張する。「随意筋の収縮に続く単なる弛緩から動物活動の完全な中断まで」、原理はすべて同じであ

る。しかしこの原理の適用される動物機能の多種多様性こそが、熟睡と完全な覚醒の間で多彩な姿を見せることになると言うのである。ブルーストの描く夢と半覚醒と目覚めの世界にわれわれも少しずつ近づいて来たようだ。ビシャは「睡眠はすべて動物活動の特質たる、この間歇性の一般法則に起因している。しかしその様々な外部機能への適用が無限の変化を見せるのである」とこの部分の考察をまとめたうえで、昼と夜が動物機能の活動と休止に一般に対応している理由にも言及している。感覚器官の興奮とその結果としての疲労のリズムである。自然の秩序において、光と闇が外部機能の活動と間歇とに規則的に連携しているのはどうしてか。それは日中には数多くの「興奮手段」が動物を取り巻き、数多くの原因がその感覚器官や運動器官の活力を疲弊させるからである、その疲労が弛緩を準備し、あらゆる種類の刺激がない夜はこの弛緩を促進する。われわれは一定の期間、動物活動をする器官の周りに興奮材料を多く置くことによって、これらの器官を「間歇の法則」から引き離すこともできるだろう。しかし最後には「その支配」を受けるのであり、間歇性の作用をある時期中断できるものは何もない、とビシャは述べる。「不寝番や徹夜が長引くと、疲れ果てた兵士は大砲の横で眠ってしまうし、奴隷は鞭で打たれ、罪人は尋問で苛まれても目を覚まさない」²²⁾。

人を眠れなくするのは感覚器官の興奮である。ブルーストの主人公にとって、未知の部屋が感覚器官に働きかける様々の刺激が彼を不安にし、眠りを奪うのであった。一方よくなじんだ部屋は、習慣の力によって、その鎮静作用の働きによって感覚を鈍化し、ビシャの言葉で言えば動物活動の間歇を自然にもたらし。この生理学者が習慣の機能をどう捉えているか、それを検討すべきところに来たようだ。(つづく)

Notes

- 1) 『スワン家のほうへ』がグラッセ社から自費出版されるのは1913年11月であるが、1912年10月、ブルーストがまずファスケル社に出版を打診した段階では、小説全体は二部構成（第一部「失われた時」、第二部「見出された時」）の予定であり、その総題として「心情の间歇」が選ばれていた。この総題が1913年5月頃までに放棄されたのは、その間に類似した題名の小説（ピネ・ヴァルメールの『心の混乱』）が予告されたことによるとされている。この時点で総題が『失われた時を求めて』、第一巻が『スワン家のほうへ』となり、作家は第二巻の一つの章に「心情の间歇」を充てようと考えていたようである。第一巻の出版に際して、そのページ数の関係から三部構成が選択され、第二巻『ゲルマントのほう』、第三巻『見出された時』が予告されるが、ブルーストはその直前まで、第二巻題名の別の可能性として、「花咲く乙女たちのかげに」と並び「心情の间歇」も挙げていた。Voir la «Notice» de *la Recherche du Temps perdu*, tome III, Bibliothèque de la Pléiade, Editions Gallimard, 1988, pp. 1225-1227 ; Maurice Bardèche, *Marcel Proust romancier*, tome I, Les Sept Couleurs, 1971, pp. 237-241.
- 2) 伝統的な服喪の習慣と近代的な個人主義との対比的な提示がブルーストの小説にみられることは、V.デコンブも指摘している。Voir Vincent Descombes, *Proust – philosophie du roman*, Les éditions de minuit, 1987, pp. 180-182.
- 3) Voir la «Notice» de la R. T. P., id. ; les «Notes et variantes», *ibid.*, p. 1432.
- 4) 『ソドムとゴモラ』からいくつか拾ってみれば、次のような用例が挙げられる。語り手のフランソワーズに対する、憐憫を基礎とした「间歇的な」愛情とか(III, p. 174)、農場で働く青年の額から「まっすぐ、規則的で间歇的に」したたる汗のしずくとか(III, p. 231)、ソドムを懐かしむ者たちによる聖書の都市の「间歇的な再建」とか(III, p. 246)、シャルリュス男爵の性格上の欠点を述べつつ語られる「精神の间歇的な病」(III, p. 476)などである。男爵自身がこの言葉を用いるのも見られる。モン・サン＝ミシェルへ大祭にあわせて出かけるつもりだと言う彼に、ヴェルデュラン夫人がその意図を重ねて質問すると、「あなたはきっと间歇的な難聴に悩んでおいでですな。聖ミカエルは私の栄えある守護聖人の一人だと申したはずですよ」と言い放つのである(III, p. 347)。
- 5) フロバールでは『ボヴァリー夫人』においてエマの服毒に際し、対処を求められて姿を見せるラリヴィエール医師が、「ビシャの膝下から出た偉大な外科学派に属する」哲人臨床医として描かれている。バルザックでは『あら皮』や『ルイ・ランベール』にビシャの名前が引かれており、後者では「われわれの外部感覚の二重性」に関して、ルイ・ランベールの考えとビシャの考えの「驚くべき一致」が語られ、前

者では主人公のラファエルが自分の著した『意志の理論』を、「メスメル、ラヴァター
ル、ガル、ビシャの仕事を補完し、人文科学に新たな道を開く」ものであるとして
いる。

- 6) Marcel Proust, *Contre Sainte-Beuve* précédé de *Pastiches et Mélanges* et suivi de *Essais et articles*, Bibliothèque de la Pléiade, Editions Gallimard, 1971, p. 8 .
- 7) Ibid., p. 268.
- 8) Xavier Bichat, *Recherches physiologiques sur la vie et la mort* (première partie) et autres textes, Présentation et notes par André Pichot, GF-Flammarion, 1994.
- 9) Nous utilisons des références abrégés pour les sept romans qui constituent *A la Recherche du temps perdu*, les éditions de référence étant celles de la Bibliothèque de la Pléiade, 4 vol, 1987-1989. A savoir:
C.S. : *Du côté de chez Swann* ; J.F. : *A l'ombre des jeunes filles en fleurs* ; C.G. : *Le Côté de Guermantes* ; S.G. : *Sodome et Gomorrhe* ; P. : *La Prisonnière* ; A.D. : *Albertine disparue* ; T.R. : *Le Temps retrouvé*.
- 10) C.S., I, p. 36.
- 11) J.F., II, p. 21.
- 12) J.F., II, p. 4 .
- 13) P., III, p. 578.
- 14) P., III, p. 519.
- 15) Voir la Présentation par André Pichat, op. cit., pp. 7 -49.
- 16) Xavier Bichat, op. cit., p. 61.
- 17) Ibid., p. 62.
- 18) Ibid., p. 87.
- 19) Ibid., pp. 87-88.
- 20) Ibid., p. 88.
- 21) Ibid., p. 89.
- 22) Ibid., p. 90.